『トム・ソーヤーの冒険』におけるポリーおばさんの家のなぞ
シッド・ソーヤーの見るトム・ソーヤーの冒険

和　栗　　了

『トム・ソーヤーの冒険』(*The Adventures of Tom Sawyer*, 一八七六年出版)のポリーおばさん (Aunt Polly) の家にはよく分からないことが幾つかある。まず、ポリーおばさんの収入は何だろうか。メアリ (Mary) はポリーおばさんとどのような関係にあり、何をしているのだろうか。シッド (Sidney Sawyer) は学校に行っているのだろうか。これらの疑問はシッドとメアリがともに働いていると考えると理解できる。

フォレスト・ロビンソン (Forrest Robinson) はシッドがこの冒険物語の興を殺いでいるとして、シッドを"kill-joy"であり"spoiler"だと述べている。[1]悪戯好きで冒険心が強く、誰からも好かれる少年としてのトム (Thomas Sawyer) に対して、シッドは模範的少年ではあっても好かれない少年という説がほぼ定着している。本論はシッドの性格を論ずるつもりはない。シッドはなぜ模範少年でなければならないのか、なぜ少年たちに好かれていないのか、根本的な、隠された原因を論ずる。

1

まず、シッドはトムの腹違いの兄弟、"Tom's younger brother, (or rather, half-brother) Sid" (*Tom Sawyer* 3) だと書いてある。[2] "half-brother"には父親が違う場合と、母親が違う場合が考えられる。

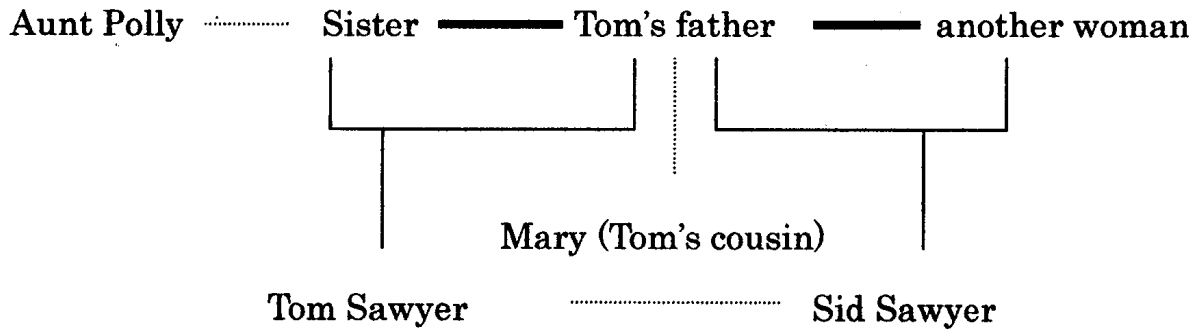
もし、トムとシッドの父親が違っていたとすれば、二人が共にソーヤー (Sawyer) という姓を名乗っているのはおかしい。姓から判断すると、父親は

ポリーおばさんの姉か妹との間にトムをもうけ、別の女性との間にシッドをもうけたと推測するのが正しい。その後この父親は死亡したか姿を消し、二人はポリーおばさんに引き取られたと考えられる。

トムとシッドは母親が違うという証拠はほかにもある。ポリーおばさんはトムを叱った後で、“but laws-a-me! he's my own dead sister's boy, poor thing,” (*Tom Sawyer* 3) と嘆く。この嘆きの中にシッドは入っていない。シッドはしっかりした模範的少年だから「可哀想な子供」ではない、という説も成り立つだろうが、ポリーおばさんは「トムは死んだ実の姉妹の子供だ」と言っているのである。「トムとシッドは姉妹の子供だ」とは言っていない点に注目すべきだ。やはり、トムとシッドは母親が違う兄弟と考えるのが正しい。

ところで、姓（surname）の点でも『トム・ソーヤーの冒険』は興味深い。ポリーおばさんの姓は一度も作品にでてこない。メアリの姓もはっきりしない。シッドの姓がソーヤーであることは、かなり注意深い読者にしか分からない。まるでこの作品では家族関係をぼやかしたいとする著者の意図が働いているかのようだ。

テキストから読み取れることから判断すると、ポリーおばさんの家族関係は下の図のようになる。



━ 婚姻あるいはそれに類する関係

— 血のつながった親子関係

┈ 兄弟姉妹甥姪などの血縁関係

メアリは "his [Tom's] cousin Mary"（*Tom Sawyer* 23）としか紹介されていない以上、トムの父方の親戚であって、ポリーおばさんの親戚と考える根拠はない。また、テキストを読む限り、ポリーおばさんとシッドの母親との間にはなんの血縁関係も確認できない。

母親の違うトムとシッドの二人には、ポリーおばさんの家の中で全く違った待遇が待っていた。ポリーおばさんと血が繋がっているトムは学校に通い、冒険と読書と恋愛遊戯に明け暮れる。これに対してシッドは金がかかる学校に行かずに、徒弟として働いている。

シッドが働いているという根拠の一つは、シッドが学校に通わずに、毎朝どこかに出かけていることである。シッドはトムの行動を監視し、ポリーおばさんに告げ口している。ところがトムの学校の行動に関してシッドは一切告げ口していない。トムは学校を無断で早退する。これは告げ口されて当然の重大な問題だ。ところが、トムが学校を無断早退したことも、学校に行く途中でハック（Huckleberry Finn）と話をしたことも、ドビンズ（Dobbins）先生に叱られた事も、学校に関連することは何もポリーおばさんの耳に入っていない。その理由はシッドが告げ口しない、できないからである。シッドは学校とは違うどこかにいるのだ。

シッドはトムのように仮病を使って学校を休もうとはしない。徒弟の少年には朝寝坊も、無断欠勤も許されないのである。シッドは毎朝トムより先に起きて出かけている。シッドがトムより先に身支度して行くところは奉公先以外には考えられない。シッドが、平日の夜と土曜日の午後と日曜日しか家にいないのは、シッドがしっかり仕事をさせられている証拠である。

シッドが徒弟として働き、トムは学校に行っているとすると、作品の冒頭にある夏の土曜日の午後の場面は興味深く読める。シッドは学校に行っていないので、トムが学校に行かずに泳ぎに行ったことを知らない。従って告げ口することもできない。また、トムとともに学校に通っていたら、シッドも河に泳ぎに行ったことだろう。そうなるとトムを庇う発言をせねばならない。ところが、シッドは徒弟奉公に行っていたので、トムが河に泳ぎに行ったかどうかわから

ない。ただ、襟を縫い付けた糸の色が違っていることに気付いた。それでシッドは "Well, now, if I didn't think you sewed his collar with white thread, but it's black." (*Tom Sawyer* 4) と言う。

トムが遊ぶ場面にシッドは見当たらない。ロビンフッド (Robin Hood) の真似をする遊びの相手はジョー・ハーパー (Joe Harper) である。戦争ごっこの時にはさらに多くの子供が加わっているのだが、シッドの姿はない。塀塗りにももちろんシッドは加わっていない。トムの遊びの世界にシッドはいないのだ。

ベッキー・サッチャー (Becky Thatcher) が母親に頼んで催してもらったピクニックに、シッドは参加していない。このピクニックは土曜日に計画されたので、土曜日の午前中に仕事のあるシッドには参加しにくかったのかも知れない。シッドは病気を理由に、そしてメアリはその看病という名目でピクニックに行かない。学校に通う子供を中心としたピクニックにはシッドもメアリも参加したくなかったのである。徒弟として働かざるを得ない子供と学校に通うことのできる子供との間には決定的な相違があるのだから。

学校に通う子供とそうでない子供との違いは大きかった。まず、学校に通うことは、紳士になるために極めて重要な条件であった。ペイン (Albert Bigelow Paine) によると、トウェインはハンニバル (Hannibal) でホール夫人 (Mrs. E. Horr) の学校に五歳の時から通ったという。[3]授業料は一週間一人当り二五セントだったという。教えた内容は、聖書を主な教材にした読み書きと、躾だったという。この二五セントを支払う経済的余裕があるか、それとも一日でも早く働らいてお金を得るか、違いは大きい。

二五セントというと、『ハックルベリー・フィンの冒険』(*Adventures of Huckleberry Finn*, 一八八五年出版) で、ジム (Jim) が牛の毛玉を使って占う時の代金が二五セントである。ジムの毛玉は贋金の二五セント貨にはあまり反応しないことになっている。二五セント貨に鐚銭が造られていることから、二五セントが決して安くないことが分かる。ある程度の経済的余裕のある家庭では、一人の子供に教育費として一週二五セント払うことができたと考えられる。

トウェインは『ミシシッピ河の生活』(*Life on the Mississippi*, 一八八三年出版) で紳士になるためには学校に通うことが重要だと述べている。トウェインがミシシッピ河の水先案内人の修業をしていた時、親方のブラウン (William Brown) と水先案内見習いのトウェインが喧嘩になった。この喧嘩でトウェインは次のように啖呵を斬る: "Our father was a gentleman—owned slaves—and we've been to school. Yes, we are a gentleman, too" (*LM* 154).[4] ろくに学校にも通っていない水先案内人程度のブラウン、お前とは身分が違うのだ、とトウェインは言いたいのだ。

この科白は水先案内人が紳士でない可能性を含んでいる点で興味深い。というのは、水先案内人を貴族であるかのように賞賛し、蒸気船で働くことをすべての少年少女の憧れであるかのように書いたトウェインが、水先案内人は紳士ではないと信じていたことになるからである。トウェインは水先案内人が紳士でないことを分かっていたがゆえに、逆に水先案内人を『ミシシッピ河の生活』の中で賞賛したのである。水先案内人に関するトウェインの感情は歪んでいたことになる。

紳士であることの条件は、よい家庭、裕福な家庭の出身であることだろう。トウェインは父親が紳士だと述べている。そして奴隷を所有していた、つまりそれだけ一家は裕福だと主張している。さらに教育を受けているので、自分は立派な紳士なのだ、とトウェインは主張したいのである。

紳士についてもう一つ。ベッキーとトムは洞窟内で迷う。この時トムは紳士としてベッキーを守り、地上に導いている。トムが性 (sexuality) に目覚めていたのかどうか微妙なところだが、トムは暗い洞窟の中で性的な言動は一切せず、紳士としてベッキーを外へ連れ出すのである。つまり紳士の条件には性的に問題がないことが含まれているのである。

金銭的余裕のある家庭の子弟が紳士あるいは淑女になるためにまず学校に行くのである。この価値観からすれば、ポリーおばさんがシッドを学校に通わせなかったのも当然である。トムの服装からして明らかなように、ポリーおばさんはそんなに裕福ではない。[5] 血の繋がったトムだけは学校に通わせ、立派に育

てたい、というのが彼女の夢であったのだろう。血の繋がらないシッドを紳士として育てることは保護者としての義務ではない。一人で生活できるようにシッドを訓練することが彼女の務めであった。メアリもシッドと大差ない状況にあったはずである。彼女も土曜日にどこかから帰ってきて、日曜学校の優等生にならざるを得ない環境で生きているのである。

2

ポリーおばさんが支配する混合家族に内在する問題、特に金と性の問題をもう少し論じねばならない。その理由はポリーおばさんの収入源が不分明なこととポリーおばさんが独身であることの二点である。

金はこの作品でも極めて重要である。シッドは金を稼いでくるがゆえに、虐待されることがない。あるいは、金を稼ぐことでシッドはポリーおばさんの家の中で一定の地位を確保している。シッドは金を持たないがために虐待される子供とは異なり、自分で金を稼いで家計を援助している。この事実を分かっているシッドは大抵のことをしても自分はポリーおばさんに叱られないことを自覚している。砂糖入れを床に落としても自分は叱られないとシッドは分かっているのだ。一方、トムは金を稼がないので虐待されているかというと、そうではない。トムは紳士になるために家でも厳しくしつけられている。ポリーおばさんはシッドとメアリを強制的に働かせているのではないだろうが、トムとシッドやメアリとの間に暗黙の区別を設けているのだ。

金はシッドやメアリを働かす要因になっているだけではない。トムをも突き動かしている。労働を嫌うトムは金を得るために宝捜しをする。彼の宝捜しと金に対する執着心は異常だ。トムが三度も盗賊の宝を探しに行くことからも分かるように、トムは強烈に金を追い求めている。

金を手に入れることで家庭内で一定の地位を得て、叱られないとすれば、トムが金に執着するのは当然である。同時に、トムが金に執着する根本的理由は結婚にあった。ハックと一緒に宝を捜しながら地中を掘り返している時、トム

は宝捜しの本当の理由を漏らしている:

> "I'm going to buy a new drum, and a sure-'nough sword, and a red neck-tie and a bull pup, and get married."
>
> "Married!"
>
> "That's it."
>
> "Tom, you—why you ain't in your right mind."
>
> "Wait—you'll see."
>
> "Well that's the foolishest thing you could do, Tom. Look at pap and my mother. Fight? Why they used to fight all the time. I remember, mighty well."
>
> (*Tom Sawyer* 178-9)

トムが金を追い求める最大の理由が結婚のためである時、金と性とが結婚を通して結びつく。言い換えれば、金が男女の関係を決めるとトムは考えているのである。

結婚あるいは男女の関係から見た時、ベッキー・サッチャー（Becky Thatcher）とポリーおばさんは対照的だ。というのは、ベッキーは男性を求めているのに対して、ポリーおばさんは男性を避けているのだから。まず、ベッキーが男性を求めていることは明らかだ。彼女はトムの稚拙な求愛に応え、結婚の約束までしようとする。トムが移り気だとわかると別の男性を求めている。さらに彼女は性に関する知識、あるいは男性の肉体を見たいと思い、ドビンズ先生の解剖学の本を盗み見るのである。[6] つまり、ベッキーは生理的にも精神的にも男性を知りたいし、求めているのである。

ポリーおばさんは、身寄りのない子供を家に引き取ることで、成人男性が家の中に入ることを防いでいる。ポリーおばさんがトムやシッドを引き取り、聖女のようなメアリーを家におく意図の一つが男性を近づけないことだとすれば、ポリーおばさんはその目的を十分に達成している。トムもシッドも性的な関心をほとんど持っていないかのようである。しかもトムは町の英雄である。

このような人物がいる家に男は侵入しにくい。さらに、メアリはトムやシッドのよき姉としての役割を果たしているだけでなく、挿絵の中で本当の聖女として描かれている。(下図参照)

このように性的関心をまったく持たないかのような少年少女を家に引き取ることで、ポリーおばさんの家庭は性の問題のない、性的なものを一切感じさせない家庭となる。そして、性のない家庭を意図的に作り上げたのはポリーおばさんに他ならない。

一人身の未亡人は勇敢な少年を引き取ることで、家の中に男が侵入するのを防いでいる。『ハックルベリー・フィンの冒険』の中で、ダグラス未亡人(Widow Douglas)はハックを引き取り、同時に婚期を逃したミス・ワトソン(Miss Watson)を家に住まわせることで、侵入者から身を守ろうとした。それでもハックの父親は未亡人の家に簡単に入り込み、ハックの部屋で息子の帰りを待っていた。『トム・ソーヤーの冒険』でのことだが、ダグラス未亡人はインジャン・ジョー(Injun Joe)にも狙われていたことを思い出さねばならない。一人身の女性は危険にさらされているのである。いささか象徴的な読みが許されれば、トムの塀塗りは性の問題のない勇敢な少年がポリーおばさんの家を守っていると知らしめることになる、と解釈できる。性的関心がないと思われる子供が未亡人の家に住む意味は極めて重要なのだ。

くわえてハックは六〇〇〇ドルという大金を持っていた。ハックを養子にすれば、ダグラス未亡人は金と身の安全の両方を手に入れることになる。ミス・

ワトソンも部屋代を払ったことだろう。トムのような悪戯好きで英雄になりたがる少年が家の中にいれば、たとえ独身中年女性の家でも男たちは侵入しにくい。ハックはトムの仲間として知られるようになった。ダグラス未亡人がハックやミス・ワトソンのような性の問題のない人たちを家に引き取る理由は、金銭的にも身体的にも身の安全を守ることであった。

ひとり身の女性が他人を引き取る時、血の繋がらない者たちから成る家庭が生まれ、血縁の問題が生ずる。マーク・トウェインは血縁関係あるいは出生や血によって象徴されるものを何度も問題にした。幾つかの作品で例証したい。『金メッキ時代』(*The Gilded Age*, 一八七三年出版) ではホーキンズ (Si Hawkins) がローラ (Laura) とクレイ (Clay) を養子にすることで、養子と実子の違いが鮮明に描かれている。つまり混合家庭における血縁関係の有無という問題である。養子と実子との間では、顔つきと姿だけでなく考え方までかなり違う。そして何よりも自分が養子であることを明確に自覚しているクレイはいち早く仕事に就き、ホーキンズ一家を支える。『金メッキ時代』でクレイが果たしていた一家の稼ぎ手としての役割を、『トム・ソーヤーの冒険』ではシッドとメアリとが果たしていると考えられる。

『間抜けのウィルソンとかの異形の双子』(*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*, 一八九四年出版) では、偽トム (the false Tom) を突き動かしていたものは血であったと考えられる。「ヴァージニア最初の入植家族」(F.F.V., First Families of Virginia) の血を受け継がない偽トムは盗みを働き、放蕩に明け暮れ、決闘には行きたがらないと語られる。そして血縁の問題は、この作品では氏か育ちか、生まれか環境かという問題と密接に結びつくものとして展開されている。

同時にこの小説では黒人の血が最も大きな問題の一つであった。この物語のもう一人の主人公ロキシー (Roxana) は十六分の一の黒人の血を受け継いでいるが、どう見ても白人にしか見えない。話をしない限り白人と見分けがつかない黒人奴隷のロキシーは白人男性の性欲の捌け口にされ、三二分の一の黒人の血を継承する息子偽トムを生まされる。

血の問題は、『アーサー王宮のコネチカット・ヤンキー』(*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 一八八九年出版) で、貴族社会にまで拡大されているが、『四四号、ミステリアス・ストレンジャー』(*No.44, The Mysterious Stranger*, 一九六九年出版) では、再び家庭内の血縁関係の有無という問題に立ち戻っている。即ち印刷所の主人のシュタイン (Heinrich Stein) と二度目の妻シュタイン夫人 (Frau Stein) とその連れ子マリア(Maria Vogel)、主人のシュタインの姪マルゲット (Marget Regen) の関係である。マーク・トウェインは、家庭内での血縁関係、あるいは一つの社会の中での血が表すものを、生涯にわたって様々な角度から追求しつづけたのである。

話を『トム・ソーヤーの冒険』に戻せば、トムの母親とポリーおばさんは姉妹であり、両者の間に血縁関係があった。しかし、ポリーおばさんとシッドの間には血縁関係がなく、それゆえにシッドは徒弟奉公に出されていた。一方、メアリがトムの父方の "cousin" だとすると、ポリーおばさんとメアリとの間にも血縁関係はない。したがってメアリも働かされている。ポリーおばさんの収入は明確には分からないが、シッドとメアリが稼いでくるわずかな金がポリーおばさんの助けになっていることは十分推測できる。シッドが家計を助けているからこそ、ポリーおばさんはシッドが砂糖入れを落として割っても、叱ることはできないのである。

血縁関係の有無による違いはポリーおばさんにとって重大であった。しかしながら、子供や社会の底辺にいる者にとって血縁関係は息苦しいものになる場合もある。家庭内で支配的な立場にいるポリーおばさんが血縁を重んずる時、シッドやメアリは嫌な思いもし、それでもポリーおばさんのもとで生活し続けねばならない二人には、模範的人物として成長するしか生きる道はないのだろう。尊敬すべき大人が要求する通りの行動しか彼らには許されていないのだから。

トウェインはこのようなポリーおばさんの差別的態度を一方的に非難しているわけではない。先の「トムは実の姉妹の子供だから」という嘆きこそ、トムにとって極めて愛情深い態度を表明したものである。その愛情のために、血の繋がったトムは厳しく叱られるが、血縁関係がなく、家計を助けているシッド

は叱られないし、シッドも自分の立場を利用している。つまりポリーおばさんの態度の違いを子供たちは敏感に感じ取って生きているのだ。

3

では、シッドは、自分は働かされて惨めだと思っていたのであろうか。シッドは面白い発言をしている。トムとジョー・ハーパー、ハックの三人がジャクソン島（Jackson's Island）に冒険にでた時、シッドはよく分からない発言をしている。町の人々は三人の少年たちが河で溺死したと諦めている。ポリーおばさんの家にジョー・ハーパーの母親がやってきて嘆く:

> "But as I was saying," said aunt Polly, "he warn't *bad*, so to say—only mischieevous. Only just giddy, and harum-scarum, you know. He warn't any more responsible than a colt. *He* never meant any harm, and he was the best-hearted boy that ever was"—mdash and she began to cry.
>
> "It was just so with my Joe—always full of his devilment, and up to every kind of mischief, but he was just as unselfish and kind as he could be—and laws bless me, to think I went and whipped him for taking that cream, never once recollecting that I throwed it out myself because it was sour, and I never to see him again in this world, never, never, never, poor abused boy!" And Mrs. Harper sobbed as if her heart would break.
>
> "I hope Tom's better off where he is," said Sid, "but if he'd been better in some ways—"
>
> "*Sid*!" Tom felt the glare of the old lady's eye, though he could not see it. "Not a word against my Tom, now that he's gone! God'll tale care of him—never you trouble *yourself*, sir! [...]."　(*Tom Sawyer* 116)

少年たちはもう死んだという前提で話している場面で、シッドは "I hope

Tom's better off where he is" と言う。そして "but if he'd been better in some ways" と付け加える。この後の発言は、「でも、もっといいことをしていたら」という条件節とも読めるし、「いくらか良い生活をしていたとしてのことだけど」とも読める。シッドが前の部分で「今居る所でもっといい生活をしていると思う」と言うと、ポリーおばさんは「私のトムに何て酷いことを言うの、もう行ってしまったのよ」と怒りをあらわにする。ここでもポリーおばさんが「私の」トムと発言していることにも注目したい。彼女にとって血の繋がらないシッドは「私の」シッドではないのだ。

シッドの前半の発言はトムがジャクソン島にいると知っているようにも読めるし、あの世でより良い生活をしてほしいと希望を述べているとも読める。ポリーおばさんとメアリ、シッド、ジョー・ハーパーの母親の四人が話しているこの場面を、トムは家に忍び込んで盗み聞きしている。トムがすぐ目の前にいることをシッドは気付いているのかもしれない。いずれの読みにせよ、学校を中心としたトムの生活がシッドにはあまりよいものとは思われていないのである。さらにシッドの後半の科白から、トムが学校や家庭で "good" ではなかった、少なくともシッドにはそう見えたことは明らかだ。

シッドもメアリも一定期間学校に通っていたことだろう。メアリもシッドも文字が読めるのであり、識字力は学校で培われたのであろう。少なくとも学校とはどのようなところか判断することはできたはずである。"where he is" をあの世と考えると、シッドの発言は「学校に行くよりも死んだほうがましだ」とも読めてくる。そうするとシッドは学校に行くよりも働くことの方がはるかに楽しいと考えていることになる。その理由の一つは学校の厳罰主義に違いない。ドビンズ先生だけでなく、ホール夫人も些細なことで体罰を与え、また厳しい体罰が当然であり、躾の一つだと考えられていたのである。

もしシッドがトムの生活を詳細に観察したとしたら、シッドはトムの言動の幼稚さを笑ったことだろう。トムは学校に行かされる事が苦痛で、歯痛を装い休もうとする。多くの読者は、この部分を、浅はかな、しかし少年らしい、ほほえましい一場面と読むのだろう。しかしトムは歯が痛くなったという、あまりに見え

透いた口実を使ってでも学校には行きたくなかったのだ。そしてこのような口実しか思いつかないほどにトムは幼稚化しているのだ。

トムの冒険は、学校の中でも、遊びも、悪戯も、恋愛遊戯も、すべてがより幼く、より子供らしく描かれている。戦争ごっこやロビンフッド遊びは十代前半のトムにはいささか似合わない。叱られるとすぐに町を出て海賊になってやる、と考えるのは短絡的だ。塀塗りの場面は、語り手が弁明しているからこそ大抵の読者は納得するけれども、よく読んでみると、騙すトムも騙される少年たちもかなり幼稚である。シッドなら騙されなかったはずだ。

働いているシッドにはトムの姿が幼く見えたことだろう。シッドはトムを監視し、トムはシッドを警戒している。トムの服の襟が白糸で縫われていたか黒糸で縫われていたかもシッドは憶えている。シッドは自分が砂糖を盗んでもポリーおばさんに叩かれないことを知っている。トムよりもシッドの方が抜け目がないのだ。つまり、トムの幼い冒険世界とシッドの抜け目なく知恵を働かす世界とが対照され、シッドのほうが高度に知恵を使っているのである。

徒弟の生活は一面では厳しかった。トウェインの作品で徒弟が登場するのは『四四号、ミステリアス・ストレンジャー』である。この作品では新入りの出来の良い徒弟の四四号が他の徒弟たちからいじめられる。新入りの徒弟が最も嫌な仕事を押し付けられるのは当然で、真冬に冷水を浴びせ掛けられ、熟練を要する仕事を無理強いされ、失敗すると怒られ、誰でも逃げ出したくなる。

徒弟に関して、これも『ハックルベリー・フィンの冒険』の例だが、ジュディス・ロフタス（Judith Loftus）はハックを逃亡してきた徒弟だと勘違いしている。この勘違いは逃亡する徒弟が少なくなかったことを暗示している。徒弟奉公はたいていの場合、逃げ出したいほど辛かったのである。

トウェインも一八四七年父親の死と同時に一一歳で印刷屋の徒弟になった。ヘンリー・ラコシット（Henry La Cossitt）が最初の主人で、一八四八年にジョセフ・アーメント（Joseph P. Ament）のもとに移る。興味深いのは、トウェインは徒弟奉公と学校生活を一八四九年まで両立させていたことである。トウェインはシッドとトムの両方の生活を約三年間同時に経験していたのである。そ

の後十代後半からはトウェインが一家を経済的に援助することになる。

トウェインはできの良い徒弟であった。兄オライオン（Orion Clemens）は弟が頼りになるからこそアーメントのもとから引き抜いたのだし、一七歳から渡り職人として働いたトウェインは、セントルイス、ニューヨーク、フィラデルフィアなど、どこでも植字工として職を得ている。ハンニバルのような田舎町で徒弟修業をしても、その技術が優れていれば東部の大都市でも通用すると、トウェインもクレメンズ一家も自慢にしていた。十代の頃の書簡や記事には学校に関する記述はほとんどなく、学校で過した時間よりも徒弟として仕事をしていた時の出来事のほうがトウェインにとっても印象深かく、鮮明な記憶だったようだ。学校で過ごした時間を懐かしみながらトウェインは『トム・ソーヤーの冒険』を書いたという説は根拠が弱い。むしろトウェインは学校での生活をかなりゆがめて描いている。

『四四号、ミステリアス・ストレンジャー』に描かれているように、徒弟の生活には嫉妬やいじめや厳しい上下関係があり、逃げ出したいほど辛かった。しかしその辛さゆえに徒弟たちは大人びた言動と自信を手にし、世間を知る者として、学校に通う同世代の子供たちを見下したのである。シッドがトムよりも大人びて見えるのは、シッドがトムと彼の幼稚な世界を見下しているからだ。付け加えて言えば、アウグスト（August）の分身マーティン（Martin von Giesbach）はマルゲットの分身エリザベス（Elisabeth）と熱烈なラブシーンを展開している。性的な言動をしないトムと徒弟とでは、男女の関係の面でもかなり違うと考えられる。学校に通っている少年少女は性的にもかなり幼い。これに対して、徒弟たちは性の面でも大人の世界を相当に覗き込んでいたのである。

シッドは徒弟たちの大人びた、ちょっと危険な世界に心を躍らせていたことだろう。それでシッドは学校に通うよりも徒弟として働くほうがよいと信じているのだ。

シッドは一方で学校に通うトムを羨ましいと感じていたに違いない。羨んだからこそ、徒弟としての自負を抱いたのである。ポリーおばさんの家の助けとな

り、トムよりも先に大人の世界に入りつつあるシッドは、トムを羨ましがりながら見下していたのだ。『トム・ソーヤーの冒険』は徒弟のシッドの複雑な立場を通して、混合家庭内の血縁関係の問題を追求したのである。

註

1　Forrest Robinsonは次のように述べている:

Sid is quintessentially the kill-joy and the spoiler; and the world he threatens to corrupt is the all-American boyhood paradise embodied and preserved in the characters and setting and action of *Tom Sawyer* [...]. We condemn Sid not because he is wrong, but precisely because, deep down, we sense that he is right.

Forrest Robinson, *In Bad Faith: The Dynamics of Deception in Mark Twains America* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1986), 60.

2　テキストには、Mark Twain, *The Adventures of Tom Sawyer* (*Mark Twain Library*. California: University of California Press, 1982) を用いた。このテキストからの引用は本文中の括弧内に省略した書名*Tom Sawyer*とページ番号を記す。

3　Albert Bigelow Paineは次のように記している:

[...] Little Sam was now ready to go to school. He was about five years old, and the months on the farm had left him wiry and lively, even if not very robust [...]. Mrs. Horr received twenty-five cents a week for each pupil, and opened her school with prayer; after which came a chapter of the Bible, with explanations, and the rules of conduct.

Albert Bigelow Paine, *Mark Twain* (New York: Chelsea House, 1980) 1: 35-37.

トウェイン自身の記憶によると四歳半から学校に通ったという:

My school days began when I was four years and a half old. There were

no public schools in Missouri in those early days but there were two private schools—terms twenty-five cents per week per pupil and collect it if you can. Mrs. Horr taught the children in a small log house at the southern end of Main Street. Mr. Sam Cross taught the young people of larger growth in a frame schoolhouse.

Mark Twain, *The Autobiography of Mark Twain* Ed. Charles Neider (New York: Harper Collins, 1990), 31.

4 Mark Twain, *Life on the Mississippi* (1911. *The Writings of Mark Twain.* Tokyo: Hon-no-tomo-sha, 1988) 154.

5 トムと見知らぬ少年（後で転校生だと分かる）との服装の違いは、下図を参照すると歴然としている。

WHO'S AFRAID?

6　ベッキーがどのページを見ていたのか、テキストには記されていないが、挿絵には次のように明示されている。